ある王国の日常

晴耕雨読。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある王国の日常

【Ｎコード】
Ｎ６４６３Ｍ

【作者名】
晴耕雨読。

【あらすじ】
不器用故に「わがまま姫」通称“黒薔薇の姫”と呼ばれる王女と、腹黒故に「優しい」と評判の教育係兼護衛の日常。

※短編集です　……不定期です。

ある日常のひとこま（前書き）

短編集の予定です

…不定期です

※サブタイトルを少しかえました。内容は変わっていません。

誤字修正。

ある日常のひとこま

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

不器用故に「わがまま姫」と呼ばれた王女と
腹黒故に「優しい」と評判の教育係兼護衛の
日常を綴った物語である。

「わたし、性格悪いかしら」

「どうしたんです？　今さら」

「……“いきなり”じゃなくて“今さら”なのね……」

「わたし、はじめて会った子になぜか恨まれているのだけど」

「あぁ、あの方ですね。たしか噂によりますと、その方のズタズタにされたドレスの近くに王女のハンカチが落ちてあったそうですよ」

「…？」

「犯人は見つかったはずですけど、その方はまだ知らされてないのでしょうね」

「…。」

「そういえば。その犯人が、以前私にすりよって誘ってきたお姫様の侍女でしたね」

「…！！！」

・・・・・・苦労人王女のあわれな物語だったりもする。

ある日常のひとこま（後書き）

これからよろしくお願いします！

ある国の黒薔薇の姫（前書き）

※サブタイトルを少しかえました。内容は変わっていません。

ある国の黒薔薇の姫

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

小さいが緑が豊かなその国に、それはそれは美しい王女がいる。

腰までとどくつややかな黒い髪。
長い睫がふちどる底の見えない黒い瞳。
近くで見ても毛穴など見あたらないなめらかな白い肌。

女性らしいまるみをもった、しかし、でるところはでて、引っこむところもしっかり引っこんでいるとても魅力的な身体。

そしてなにより、口元にうかべている微笑。

その微笑はまるで物語に登場する――――

――――悪女のよう。

なにかたくらんでそうなその微笑は口元にある黒子で妖艶さが増し、いっそうあやしく見える。

堂々とゆったりとした歩き方もさらに拍車をかける。

あやしい微笑や妖艶な雰囲気を裏切らず、性格はわがままで性悪。

もはや“悪女のよう”ではなく“まさに悪女”。

周りの人々は彼女をこう呼ぶ。

その美しさに羨望こめて。

その性格をそしり笑って。

“黒薔薇の姫”と

周りの人々は誰も知らない。

そのなにかをたくらんでいるような微笑は、特に人前・緊張しているとき目が笑わず、口元だけ動いてしまい中途半端な笑みになるという、なんともあわれな不器用さのせいだということを。

堂々とゆったりとした歩き方は、歩くスピードを速くしてしまうと姿勢よく歩けないという、これまたあわれな不器用さのせいだということを。

わがまま、性悪な性格は、その容姿と誤解から生まれた勝手なイメージのせいで、何を言っても嫌味か何か裏があるかのように相手にとらえられてしまうだけなことを。

「ねぇ」

「なんです？」

「わたし、清楚系をめざしていたんだけど」

「だめですよ」

「…？」

「私の好みが色気たっぷりの妖艶系なのですから」

そして、

この「優しい」と評判の、聖人のような見かけとは裏腹に煩悩たっぷりな、王女の教育係兼護衛のせいだということを。

だれも知らない。

「だれか教育係を替えてちょうだい」

ある国の黒薔薇の姫（後書き）

・・・あわれ、王女様。

読んでくださり、ありがとうございます！

次話は王女の教育係兼護衛の紹介です。

ある国の王女の宝石（前書き）

「日常のひとこま」と少しつながっています。

まだ読んでいない方はそちらを先に読むことをおすすめします。

※サブタイトルを少しかえました。内容は変わっていません。

ある国の王女の宝石

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

小さいが緑が豊かなその国に、それはそれは麗しい男性がいる。

襟首にかかる長さのうつくしい銀髪。
知性を感じさせる瞳は、深い海のいろ。
すらりとした長身だが、ひ弱な印象をあたえないのは、服の下に隠された、しなやかな筋肉があるからなのだろう。

剣を腰にさげ、背筋をのばして立っている姿は、おもわず魅入ってしまう。

無駄のない、きれのある動きは、つい目で追ってしまう。

実際、そういう人が大勢いた。

そしてなにより、麗しい顔にいつも浮かべている微笑み。

その微笑みはまるで物語に登場する――――

――――天使のよう。

すべてをつつみこむような微笑みはどこかほっとする。

その安心させる微笑みと麗しい姿を裏切らず、女性に優しく、紳士的。

現実にいる人物にたとえるなら、彼は

“天使のよう”ではなく“まさに聖人”。

吟遊詩人は彼をこう謳った。

その美しさに羨望をこめて。

その立場に憐れみをこめて。

“黒薔薇姫の宝石”と。

周りの人々は知らない。

そのつつみこむような微笑みは、自分の容姿を知りつくした、すべてが計算されたものだということを。

いつも微笑みを保っているということは、自分の思考を読めないようにするための、ある意味の無表情であることを。

彼が今まで助けてきた人々のほとんどが、権力をもった貴族だということを。

「王女。これを」

「？　なによ」

「以前、“ハンカチを落とされた”でしょう？」

「……あぁ、“あれ”ね。というかわたし落としてないわよ」

「そのハンカチを“拾って”くれた者からだそうです」

「まさかのスルー！
……これがハンカチ？」

「あいにく、私には宝石やシルクの布地にみえます。しかもけっこうな数の。大丈夫ですか？」

「……最後の問いかけ、どういう意味なのか聞かないでおくわ…。この送り主、以前言っていたお姫様のところからよね？」

「おそらく、そうかと」

「こんなに高価なものをたくさん…」

「不思議ですね。あの件、結局は犯人は王女のまま、噂は広まったのに」

「！？」

「ああ、それと。事が起こった次の日に、その落ちてあったハンカチを渡されたので“ありがとうございます。”と言っておきました」

「！！！！！」

その実は
黒薔薇の姫に対して周りが勘違いしているのを知っていながら、誤解を解くどころか、わざとよけいこじらせていることを。

だれも知らない。

「謝罪の品を送って借りを返そうとするなんて。貸しを作った意味がないじゃありませんか。直接謝罪にこさせますか」

「むしろ、あなたがわたしに謝ってほしいわ」

そして
彼には大きな秘密があるということは、

黒薔薇の姫さえ知らない。

ある国の王女の宝石（後書き）

王女・教育係（略）が物語の中心になりますが、

もっと主要人物をだす予定です。

次話もよろしくお願いします！

主要人物（前書き）

本編でこんなに詳しくかけないと思うので……

主要人物

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

……の登場人物

ルクレティア・シュテンベルク　１７　【女】

・髪…黒　腰までとどく長さ
　瞳…黒
・身長…１６７？
・第一王女

・通称“黒薔薇の姫”

６才の時、アーネストのあるじになる。

アーネスト・ダーウィン　２３　【男】

・髪…銀　襟首にかかる長さ
　瞳…青
・身長…１８２？
・第一王女の教育係兼護衛
・周りの人々から優しく、美しいと評判（王女いわく、腹黒・性悪たぬき）

１２才の時、ルクレティアに仕える。

もっとくわしく知りたい人は下へ

←

←

←

←

ルクレティア・シュテンベルク　１７　【女】

・髪…黒　腰までとどく長さ
　瞳…黒
・身長…１６７？
・第一王女
・通称“黒薔薇の姫”

歩く姿
・堂々とゆったり

表情の特徴

・特に人前・緊張している時、目が笑わず、口元だけ笑う。
（妖艶・何かたくらんでそうに見える）
・もちろん自然体の（美しいというよりかわいい）希少な笑顔はある。……が、今現在、アーネストの独占状態。
・どちらの笑い方も本人は無意識。

雰囲気
・その姿＋その歩き方によって本人は気づかないが、とても目を惹きつける。
・どこか威圧感がある。
・初対面の人ではなくても、怯えられることはよくある。彼女を見て気後れする人もしばしば。

しゃべり方
・アルトよりのソプラノ。つややかな声。
・そのしゃべり方はなぜか周りには余裕あるように聞こえるらしい。
・一人称…わたし

6才の時、アーネストのあるじになる。
その頃から、アーネスト好みに仕立てられていったと言っても過言ではない。
年齢相応に見られたことはない。
見かけとは裏腹に、子供好き・世話焼き・苦労人王女。

アーネスト・ダーウィン　２３　【男】

・髪…銀　襟首にかかる長さ
　瞳…青
・身長…１８２？
・第一王女の教育係兼護衛
・周りの人々から優しく、美しいと評判（王女いわく、腹黒・性悪たぬき）

歩く姿
・きれのある無駄のない動き

表情の特徴
・相手をほっとさせる微笑み（警戒心をなくさせる）
・王女にむける表情は周りにむけるものとどこか違う。
・前者はもちろん意図的だが、後者は……？

雰囲気
・あせることなど無縁そうな、落ち着きっぷり。
・おだやか（だが彼を見てなぜか恐怖を感じる人もけして少なくはない）

しゃべり方
・心地よいテノール
・彼の言葉は相手の受け取り次第で意味が大きく変わる（もちろんわざと）
・一人称…私

１２才の時の時、ルクレティアに仕える。
ちなみに今の趣味は、王女をいじめ……かまうことと、彼女をみごと勘違いしながら、成立している？会話・場面にいること。
実はこの国出身ではない、謎多き人。

主要人物（後書き）

幼い頃の王女と教育係（略）の日常も書いていこうと思います。

次はまだ登場していない人物の紹介です。

まだ、知りたくない人はご注意ください。

日常に関わる人達（前書き）

まだ本編で登場していない人物たちです。

知りたくない方はとばしてください。

日常に関わる人達

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

……の登場人物２

ネリア・ルージェル　２０　【女】

・髪…亜麻色　背中あたりまであるがいつも纏(まと)めている
　瞳…琥珀
・身長…１５８？

・第一王女（ルクレティア）の侍女

唯一の第一王女付き侍女。
周りには“かわいそうにねぇ”とよく言われるが、いつも王女（ルクレティア）にはアーネストがそばにいるので、着替えの用意・手伝いや雑用ぐらいしか仕事はない。……むしろ、ずっとそばにいたいぐらいのルクレティア崇拝者である。本人（ルクレティア）には内緒で“ルクレティア様日記”をつけているらしい。

リリーシェル・シュテンベルク　１６　【女】
・髪…金　背中あたりまでの長さ
　瞳…緑
・身長…１６１？
・王の隠し子

母が王妃（ルクレティアの母）の元侍女。
王の子を身ごもったと知った王妃がリリーシェルの母を追い出した。
今まで針子として働いていたが、１６才で母が亡くなったと同時に、使者から王の子だといわれ無理やり王宮へ。現在は第二王女。王と同じ髪色と瞳。

ライラック・フローディン　２１　【男】

・髪…金まじりの茶　襟首にかからない長さ
瞳…茶
・身長…１８０？
・第二王女（リリーシェル）の護衛

明るく、正義感が強い。剣の腕はよいのだが、一人でつっぱしって周りが見えなくなることも。リリーシェルに一目ぼれ。そのおかげか、剣の腕をさらにみがき日々上達していっているが、それに比例して周りがもっと見えなくなったとか。なぜか、アーネストをライバル視。

フロックス・シュテンベルク　６　【男】

・髪…金　襟首にかからない長さ
瞳…緑
・身長…１３５？
・第一王子

子供らしく無邪気で愛らしい。素直なためか学問の呑み込みがはやく、初めてのこともあまり苦労せずできてしまう器用人。ルクレティアに、はじめから懐（なつ）く。王女（ルクレティア）いわく“この子がまさに天使！”

シアルヴィ・ユグドラシル　２５　【男】

・髪…紺　襟足が長め
　瞳…蒼
・身長…１８６？
・隣国の第三王子

視察ついでに花嫁探しで近くの国々を訪れている。
とてもおちゃらけた感じだが、ときどき目が鋭く光る（気づくものはほんのわずか）ので油断していると危ないタイプ。王女（ルクレティア）いわく“アーネストと同じにおいが…！”

日常に関わる人達（後書き）

必要に応じて、追加します。

ある晴れの日の会話（前書き）

本編より、何年か前の話。

……であり、その後も何度も繰り返されている話。

ある晴れの日の会話

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

その国にはそれはそれは美しい王女がいる。

周りの人々は彼女をこう呼ぶ。

その美しさを褒め称えて。
彼女がもつ色と、その心の色をかけて。

“黒薔薇の姫”と。

ある者は言う。
「彼女はまさに“美しいモノには棘がある”という言葉そのものだ」
と。
また、ある者は言った。
「こんなにおもしろく、そばにいてあきない人は他にはいない」
と。
青い瞳を細めて。
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
「王女、知っていますか？」
「？　なにを」
「その手紙……

「いたっ！」

刃がしこまれていることを」

「〜っ！！」

「おやおや。言ったそばから」

「……あなた、分かってて手紙を渡して、しかも、ちょうど私が開ける時言ったわね…！」

「ほら、王女。お手を」

「！　完全無視！　……って、きゃぁ！！」

「どうしたのです？」

「あ、あなた、なに……」

「舐めたほうが治りは早いかと」

「〜っ！！」

「おや？お顔が真っ赤」

「誰のせいで…！」

「？　なに言っているんですか。私のせいですよ？　いやいいですね。私のことで王女が表情を変えてくれるなんて…」

「ーーーーっ」

「何度やっても初心なところがまた。裸までみている仲ですのに……」

「！　ちょっと、誤解を招くような言い方はやめてちょうだい！あなたがわたしの着替えの時はもちろん、入浴中も堂々といるだけでしょう！！」

「私は王女の護衛でもありますから」

「風呂場までくるやつは、もはやただの変態よ！」

「そんなに気になっていたなんて。しょうがないですね。一緒に入りますか？　それなら安心でしょう？」

「むしろ危険だわ！！」

教育係兼護衛に向かって怒っている王女と、それを聞いて困った方だというように珍しく顔を困惑させている彼。はたからみれば、王女に手を焼いている様にしか見えない。そして、それを見た周りのものは“またアーネスト様にわがまま言っているよ、あの黒薔薇の姫は”と、なぜか王女の悪名と彼の評判は上がるばかり。

「もう疲れたわ……
なんであなた疲れていないのよ。むしろ輝いている気が…！」

「はてさて。この送り主、どうしましょうか。この手紙のせいで王女の白魚のような手に傷が……」

「……ちょっと待って。この傷はけして手紙のせいではなく、あなたが気づいて対処できた時点で、すでにあなたのせいよ！」

「ですよね、私もそう思います」

「ーーーーえ？」

「では、今から王女のために……」

「！？　ちょっ、まっ…　！！！　（はめられた！？）」

いつも笑みを湛えている（王女をいじめてすっきり顔）教育係兼護衛と、どこか威圧感がある（いじられてただ疲れているだけの）王女の姿を王宮で知らぬものは、だれもいない。

ある晴れの日の会話（後書き）

あれ？アーネストが変態に…

手紙（いたずら付き）が送られてくる限り、このやりとりは終わることはないでしょう…

ちなみに、アーネストはその送り主たちをちゃっかりチェックしています（笑）

次話は新しい登場人物が！……出れるといいな

これからもよろしくお願いします。

ある侍女の日常（前書き）

初登場です！！

ある侍女の日常

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

はじめまして。

わたくし、ネリネと申します。
唯一ただ一人のルクレティア様の侍女をやっております。うふふ。

なんていい響き…

と、いってもほとんど仕事はありません。
身の回りの最低限のことは、ルクレティア様お一人でなさいますし、なによりアーネスト様がわたしくの仕事を奪います。

仕事の初日のとき、ドレス選びから着せるまで、アーネスト様お一人でやられるのを見たときは驚きました…。あれはずいぶんと手馴れて……

どうやら、わたくしが就くまで、アーネスト様がほとんどルクレティア様の身の回りのお世話をやっていたそうで、侍女はめったに呼ばなかったそうです。（今では着替えはわたくし担当です！　……これも奪われるときが多々ありますが）

ところが、ルクレティア様に月ものがきたとき、さすがに侍女を就けたわけです。

……実は、そのお世話もアーネスト様が嬉々としてやろうとしたのですが、ルクレティア様が頑固としてゆずらなく、わたくしを就けたこともアーネスト様はしぶしぶだったそうで……。

このことは、わたくしがルクレティア様のお世話をしているとき、アーネスト様が毎回のように言ってくるので嘘ではありません。

……なぜ言ってくるのでしょうか？

まあ、疑問はさておき、もう一度言いますが、わたくしは唯一ただ一人のルクレティア様の侍女です。ここ重要です。

美しく、かわいい、ルクレティア様。

姿が美しく見惚れるのはあたりまえですが、なによりその表情がイイのです！

疲れているのか、物憂げそうに、目をふせて溜息をついているとき。アーネスト様に何か言われて怒っているのか、目を潤ませて、なめらかな頬を朱に染めたとき。そして、普段の笑みとはまた違う、まだ一度しか見たことのない、あの微笑み。

ああ、食べちゃいたい……。

人前だと緊張してしまうのか、普段よりさらに不器用になるところも、またかわいい……

もう、たまりません……。

周りの者は、わたくしに“かわいそうにねぇ”とか言いますが、いまだにその意味が分かりません。

大好きなルクレティア様の姿を毎日見れる……　うふふ。なんて、すてきなお役目……

このお役目に不満があるとすれば、やはり、アーネスト様がわたくしの仕事を奪うことでしょうか。

アーネスト様ご自身は嫌いではありませんが、わたくしの仕事を奪うアーネスト様はべつです。

さすがに毎日こうですと、ルクレティア様で癒されているわたくしもストレスが溜まります。

今日も、アーネスト様はルクレティア様を連れ出して……

はあ。

こういうときは、仕事仲間と愚痴を言い合うにかぎりますね。

「はぁ」

「どうしたの？　また“あれ”？」

「そうなんですよ～。毎日、毎日、ルクレティア様とアーネスト様がご一緒で……。もう、離れてほしいです…」

「それ、あたしも見たわ。いいかげんにしてほしいわよね。毎度のごとく、連れまわして。いくらあの人が優しいからって、強引にもほどがあるわ」

「はぁ。ほんと、そうですよ。着替えから、お茶会、それに入浴までご一緒なんですよ！」

「まあ！！　それ、本当！？」

「はい。ほんと、いやになります…

「こうしちゃいられないわ！　アーネスト様ファンクラブたちに知らせなければ！！」

ルクレティア様のお世話が全然できなくて……

って、あれ？　もう行ってしまいました？　まだまだ、言いたいことあったのに……」

しかたありませんね。
ルクレティア様とアーネスト様が戻るまで、六度目のルクレティア様のお部屋の清掃をしていますか。

あぁ、わたくしも、ルクレティア様のおそばにずっといたいです……。

○月X日

＞ルクレティア様の基礎健康チェック＜

・体調　○　　・肌　◎　　・髪　◎

今日も美しいルクレティア様。

今朝はアーネスト様に負けてしまい、朝一番に起こすことができませんでした……。　が、ドレスの着替えは勝ち取りました！

アーネスト様がさりげなく青色のドレスをすすめてきましたが、もちろん琥珀色。うふふ。やっぱり、ルクレティア様はなんでも似合います。

今日一日、わたくしの瞳の色につつまれて……ああ、思い出すだけでぞくぞくします…！　少し、アーネスト様からの視線が痛かったような気がしましたが……気のせいですね。

明日は必ず、アーネスト様より早く起きて、ルクレティア様に一番に話かけなければ…！

ある侍女の日常（後書き）

王女（ルクレティア）の表情や行動を正確に読み取ることができる貴重な人物なのに、
変た……変人のネリネ。（……だからか？）

そして、何気に王女に対する勘違いに加担している侍女でした。

……わざとではないんですよ？

わざとではないんですが、
無意識ゆえにある意味アーネストより、性質（たち）が悪いです……

次話もよろしくお願いします！

ある一日の過ごし方（前書き）

会話文が中心です。

ある一日の過ごし方

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

「一日部屋でくつろぐのも久しぶりね」

「こうして、ルクレティア様と語り合えるなんて……！　一日中、独占！！　うふふ……」

「……ネリネ…？」

「ご臨終です」

「……アーネスト。勝手にネリネを殺さないでちょうだい」

「はっ！　すみません、ルクレティア様。わたくし、興奮しすぎて軽く逝っていました……。恥ずかしいっ…！！」

「……」

「せっかく、ルクレティア様とご一緒なのに、もったいないことを……。時間はまだたっぷりありますね！　うふふ、何からお話いたしましょうか…。
色狂いクジェイット伯爵がとうとう不能になったとか」

「あ、あぁ、あの方ね。会うたび、ねちっこく見てくるからよく覚えているわ。……不能とはねぇ」

「それはそれは。とても良い知らせで」

「まあ！　アーネスト様ったら今日も素敵な笑顔」

「…！　アーネスト、あなた、まさか……！」

「どうかなさいました？」

「……ナンデモナイワ」

「ああ、ほかにも、料理長が二股していたり。
なんでも、清純ぶっている強(したた)かな女性と、１０代の綺麗で元気いっぱいな子が相手らしいです」

「１０代！？　たしか料理長(あのひと)、３８歳ぐらいじゃなかったかしら。
……まあ、相手が１６歳ぐらいの女の子なら婚姻時だけどねえ……」

「まあ！　ルクレティア様。違います！」

「？　なにか間違ったかしら？」

「男の子です！」

「……男の子？」

「ええ！」

「……それって、その、……“１０代の綺麗で元気いっぱいな子”が？」

「はい！」

「ーーーなんです？　王女。
私をそんな熱いまなざしで見て。しかたないですねぇ、やります？」

「ーーーいや。なんとなく……　って、なにをよ！！」

「そんなに心配しなくて大丈夫ですよ。ーーーそういう場合、相手を不能にしていますから」

「……経験済みなのね…」

「何ですかその言い方は。後ろはしっかり守っていますよ。今後も使う予定もありませんしね。まったく、誤解を招くような言い方はよしてください」

「あなたには負けるわ！！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

色狂いクジェイット伯爵の話。

料理長の二股、恋のお相手の話。　から、はじまり、

フロックス王子が黒猫を拾った話。

希少な薬草、ツユノ草がみつかった話。

今年の流行のドレスの話。

ルークリア公爵に男児が生まれた話。

ネリネが話題をふり、ルクレティアが相槌をうったり、質問をしたり。そこにアーネストが茶々をいれる。ほぼ一日おしゃべりだけだったが、みな、飽きるどころか、“もうこんな時間！”と驚くほど、会話は盛り上がった。

「あら、あっという間ね。でも、大丈夫。まだまだ時間はあるわ！！」

「おやおや。……他にはどんな話があるのです？」

「話ですか？　他にはくだらない話しか……そうですね、実は王には隠し子がいて、その子を近々王宮に住ませるとかぐらいしかないです。くだらないでしょう？　噂なら面白いのがたくさんあるのですけど……」

「！！　今さらりと、重大なことを言ったわよね！？　というか、料理長の二股うんぬんより、それが一番、重要な気がするのだけど……！？　料理長どんだけ……！！」

「噂ではなく話として、この、侍女が言ったことなら事実でしょう。情報を集め、なおかつ見極め、整理する能力がとても長けていますからね。
まあ、今回は他の者に聞かれたとしても大丈夫でしょう。王宮に住ませるぐらいなら、いずれ皆知ることになりますし、遅かれ早かれ、王女は巻き込まれますしね。大丈夫ですよ」

「人払いはしてあります！　こんな魅力的なわたくしのルクレティア様の無防備な姿を誰にも見せたくありませんから！　もう、ずっと外に出ないでここにいてほしいです…！
盗聴の心配もございません。わたくしだってまだやっていないのに、他の者がやるなんて許せませんもの…！
あ！　もしかして、小腹がすきました？　わたくしが丹精こめてつ

くった愛情たっぷり（秘薬もたっぷり）紅茶の葉・お菓子を用意してあります！！　なので大丈夫ですよ！」

「あなたたちの“大丈夫”っていうほど不安なことはないわ…！」

“大丈夫”と言っておきながら、不安を駆りたてる発言をする者。“危険人物はココですよ！”と言いたくなる様な、身の危険を感じさせる発言をする者。

どちらも、“なにが大丈夫なの！？”と聞きたいくらいだ。……まあ、言ったら最後、“あんなこと聞かなければよかった……”と、後悔すること間違いなしなので、絶対言わないが。

この有能で俊敏な二人の変な行動も、思わず叫びたくなる（実際に叫んでしまうことが多い）ような発言も、すべては、ルクレティアへの愛。……と、思いたい。いや、そう思わなくてはやっていけないということは、この、とても濃ゆい二人と長い付き合いになるルクレティアが、自然に学んだことである。

でも、そう自身に言い聞かせても、やはり、不安になってしまう。

いつも　いつも　心配で　不安で

聞きたくない
わかりたくない
でも
ずっと　聞きたかった

その質問の答えは
その唇からこぼれる　答えは
もう　想像はついている
それは
一番　自信があり
一番　はずれてほしい　答え

けして　間違ってはいないだろう

だけど　やっぱり　本人から言ってほしい

ねえ、　嘘は　つかないで

言葉は　短くて　いい

だから　言って？

「あなたたち、　変態　？」

のちに、大騒動の根源となる“王の隠し子”ついて話がふれたのは
もう少しあとの話。

ある一日の過ごし方（後書き）

まだ、“王の隠し子”はのんびり街で暮らしていたころの話。

次話も、よろしくお願いします。

ある黒猫の日向ぼっこ（前書き）

※この物語は９月１２日に投稿したものです。内容は変わっていません。

ある黒猫の日向ぼっこ

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

我輩は猫である。

名前は、まだ　ない。……と、言いたいところではあるが、実は　ある。

我輩は、なんでもこの国の王子に拾われたらしい。
王子否、主の名はフロックス・シュテンベルクという。
まだ十にも満たない、金髪の愛らしい子だ。我輩に対しても優しく接してくれる。この奇妙な赤と黄のオッドアイも気味悪がらずに、むしろ気に入ってくれている。主が王子だからなのか、日々の待遇も悪くない。むしろ、良すぎるくらいだ。日課とする、庭園にあるイスの上での日向ぼっこも最高である。

さて、今日も行ってくるとするか。

我輩は、ほかの猫、というか動物と比べると、少々珍しい。
この、赤と黄のオッドアイ。そして、人の言葉を理解するのだ。この能力はべつに、いつから、というわけでもなく自然に身についていた。

だが、けして頭が良い、というわけでもない。　が、こうして今まで生きてこられ、なおかつ金持ちの家に拾われるほどの運はある。

自分で言うのもなんだか、おかしな猫である。

「あら。可愛い黒猫ちゃん」

ん？　今日はどうやら先客がいたようだ。

「あの侍女が言っていた、王子が拾った黒猫ですね」

「ああ！　この子ね！　あら、目がオッドアイだわ。綺麗ねえ」

「そういえば。王子が東洋にはまっていたとかで」

「……ああ。大丈夫よ、黒猫ちゃん！　そこ以外、フロックスは完璧よ！！」

……この二人が何のことを言っているのかを、分かりたくなくとも、分かってしまったのが悲しいものである。

それと、もうひとつ。

分かったというか、感じ取ったことがある。

ーーーーーこの女性は、主と血が近しいものではないだろうか。

主は金髪・緑眼に対し、この女性は黒髪・黒眼。

髪の色も、瞳の色も、肌以外の色素はまったく違う。
髪質も、主は少しくせっ毛だが、この女性はまっすぐ腰までとどいた、ストレート。
瞳の形も、緑の瞳はくりっとした二重（まだ子供だからかもしれないが）。黒の瞳は同じ二重でありながらも少々切れ長だ。
第一印象も、主は人懐っこそうだが、この女性は相手をどこか気後れさせるものがある。

はっきりいって、外見は似ていない。

唯一、共通点をあげるとすれば、どちらも超絶な美貌、ぐらいだろう。

だが、我輩はこの女性は主と近しいものだと感じる。

そう。いま、我輩を撫でる、この手が。

おもわず、ゴロゴロと喉が鳴ってしまう、絶妙な愛撫が。

我輩の瞳を見て、「きれい」と言ってくれたことが。

なにより、いちど知ってしまったらもう離れることはできない、妙な引力が。

ああ、すべてが、心地よい……

……ん？
なにか、さきほどからおもわず毛を逆立ててしまうような、突き刺すような視線が、我輩に……

「かわいいですね。ーーーー王女の膝上で撫でられてゴロゴロと」

……いや、気のせいではない…！
我輩が路地裏暮らしで鍛えられた、野生の勘がいっている。

「ーーーーそれにしても、きれいな毛並みですねえ」

“はやく、にげろ！！”　と…！！

「王女。近頃、寒くなってきたので、毛皮のものもいいのでは？」

「あら。そうね」

「どんなものがよろしいですか？　王女の髪と瞳の色とそろえて、黒色にしましょう」

「!?　まさかの自己完結……!!」

やばいぞ…!!　これは、やばい……!!

この男の言っている言葉の含みが、分かってしまった…!

決定的証拠は、この女性に勝るとも劣らないこれまた麗しい男の微笑。微笑んでいるのに、我輩を見る目はいっさい笑っていない。それどころか殺意が……!!

「あっ!　いた、いた!　ゴン三郎!!」

……。

「あら、フロックスだわ」

「おや、残念」

……。

我輩は猫である。

名前は、……「ゴン三郎」という。

我輩は、主がとても好きだ。

日にあたるといっそう輝く金髪も、好奇心にきらめかせる緑の瞳も、
我輩のお気に入りである。

まるで、神の愛し子のような主。

……だが、ネーミングセンスは恵まれなかったらしい……。

「おーい、ゴン三郎！」

……。

ある黒猫の日向ぼっこ（後書き）

第一王子のちょこっとした紹介でした。

次話も、よろしくおねがいします。

ある酒屋のおじさん（前書き）

「ある一日の過ごし方」から数日後の話。

ある酒屋のおじさん

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

いらっしゃい。

お？　見かけない顔だね？
まぁ、フードをかぶってちゃ顔もわからないんだけどな。雰囲気だよ、雰囲気！

旅人かい？……どうやら訳ありそうだね。
まぁ、そんなかたくなんなって。

この国は緑が豊かないい国さ！
緑は心を癒やしてくれる。食糧も豊富、水もきれいだし、内戦もほとんどない。お前さんもここで癒やされるといいさ。

そうそう、癒やされるといえば、

お前さん、ここを出で右に曲がった先に針子屋があるんだけどよ。
その針子がこれまた、かわいいんだ！

小さな店を奥さんと一緒にかんばっている、けなげで良い子でな。
光を紡いだような美しい金髪。静かな森を思い出させるような緑の瞳。ちょこんとのっている小さい鼻に、やわらかそうな紅い唇。ふっくらした頬は薄桃色に染まり、彼女の表情がころころかわる姿も、愛らしい。

どうだ？　俺もなかなかだろう？

小さい花が綻ぶような彼女のあの、はにかんだ笑顔に、ここいらの男どもはいちころさ！！
お嫁さんにしたい女性ＮＯ．１ってな！　実際、彼女に惚れているやつも多いんだがな、それに気づかない天然のところもまたかわいいんだ！！

お前さんも、惚れちまうだろうよ。
ああ、大丈夫。お前さんが女だとしても、俺は祝福するぜ？
その場合、どっちが男物を着るか相談しておかなくちゃな。ああ、もちろん、どっちも女物ってのも有りだぞ？

ハハハッ！！　冗談だよ冗談！！　まあ、そんぐらい、かわいいってことよ！

一度、この帰りに行ってみるといい。……って言いたいところなんだがな、実はその店、もうやっていないんだ。

それがよ、とつぜん、切り盛りしていた奥さんが亡くなってな。
しかもその後、これから大変だろうから家にこないかって、彼女に

惚れていた男どもがプロポーズをしようとその店にいったらよ、店には誰もいなくてな。結局、この街やほかの家をさがしても彼女は見つからなかった。

礼儀正しい子だったから、もし、街を出るにしてもあいさつもなしにいなくなるはずはない、なにかに巻き込まれたんじゃないか、って皆心配してんだ。
元気に過ごしていればいいんだけどなあ。

ああ、ごめんよ。ちょっと、しらけちまったな……

なんの話をしてたっけ？
ああ、そうそう。この国の話だよな。

この国も綺麗なんだがな、やっぱり、美人も重要だよな。
さっきから、そんな話しかしていないって？
ハハハッ！！　いいじゃないか！！

この国に来たからには一度は見ておきたい美人なんだ！　まあ、男なんだけどよ。

おっ！　なんだ、お前さん、知っていたのか。そうそう、そのお方だよ。
銀髪、青い瞳の整った顔立ち。ついでに優しいとくれば、女性はだっまちゃいない。なのに、浮いた話が一つもありゃしない、姿も心も聖人のようなお方だよ。
……だがな、やっぱり神様は優しくなかった。

“黒薔薇の姫”だよ。

容姿は最高だが、性格は最悪。彼女の悪名は誰でも知っているよ。
この国の王女でもあるしな。
彼はその“黒薔薇の姫”のもとで働いているんだ。

気の毒に。

美しい彼をそばにおいておきたいのか、いつもつれて歩いているらしい。
毎回、王女のわがままにつきあうのは大変なのによ、嫌な顔ひとつしないでいつも微笑みを失わないそうだ。本当、優しいお方だよ。
それに…

なんだ、もういくのかい？　これからがいいところなのに。

まあ、いいさ。また来てくれよな！

「明日の夜会で、王の3人目の子が発表されますね」

「ええ！　女の子ですって！

……ああ、嫌なこと思い出した。でも、わたしってそんなに評判悪い……？　アーネストの外面のよさも、わたしの噂も今さらってことも分かっているけど、ショック――――より、悔しいわ……！

いえ、それよりも絶対、彼女と仲良くなるの！　そして、お友達に……！」

「おや。王女ったら、そんなに意気込んで。友がひとりもいなくて、今度こそはじめての友達を手に入れようとする人も、きっとこんなに気合が入っているんでしょうねえ」

「……一緒にお茶会したり、おしゃべりしたり。会えない日には、手紙交換するのもいいわね！　あと、プレゼントをおくるのも……」

「一度もやったことがないような人も、きっとこのようにはしゃぐ

んでしょうねえ」

「ーーーーっ、なによ！？　さっきから！！」

「どうしたんです？　王女。そんなに怒って。べつに王女のことは何ひとつ言っていませんよ。そのような人もいるのでしょうねえ、といっただけで」

「……！！」

「それに王女なら先ほどの事は経験済みでしょう？」

「厭味満載お茶会、刃物入り手紙、虫のプレゼントならね……！」

「そんなことより」

「その元凶のくせに、“そんなこと”……！？」

「王女はひどいですねえ」

「……？　ーーーーなによ、アーネスト。さっきから、いつもより

……」

「王女」

「っ！？　ちょっと……！　近す…」

「私を置いていかないでくださいね。

ーーーーーなんたって、“美しい私をそばにおいておきたいのか、いつもつれて歩いている”ぐらいなんでしょう？」

「！！」

「私は王女の教育係であり護衛でもありますから」

～～♪　～～♪

ん？　なんだい？

……ああ、さっきの話の続きが聞きたいって？
ハハハッ！！　なんだ、今まで聞いていたのか！

んじゃあ、ちょっとばかし。

実はな、この店に、ーーーーーーーーその彼が来るんだ！！
まあ、ときどきだけどな。

なんでもよ、彼が言うには昼も来ていることもあるらしいんだが、
夜しか分からなくてな。あれほどの美貌に気づかないってことはな
いから、きっと、変装でもしているんじゃあないかな。
まあ、夜ならまだしも昼なんかにきたら、客はもちろん、店員まで
彼に見惚れて使い物にならなくなること間違いなしだから、こっち
としては好都合なんだけどよ。

おっ！　そういうお前さんもかっこいいじゃないか。

ん？　その格好は騎士さんかい？
へえ！　今度からお姫様の護衛につくのか。がんばりなよ！
じゃあ、もしかしたら彼にも会うかもしれないな！！
ほんと良い人だから、困ったときは彼に相談しなよ。彼なら、必ず助けてくれるさ！

おっ、なんだい、もう時間か？
ああ、仕事じゃあしょうがないな。今日は楽しかったよ！
じゃあ、また来てくれよな！

茶髪の兄ちゃん！！

ある酒屋のおじさん（後書き）

さりげなく。さりげなく。

……いえ、堂々でした。

誤字、脱字がありましたら、どんどんいってください。

次話もよろしくお願いします。

ある非日常の始まり

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

ついにやってきた！

今夜は、どの貴族たちも好奇心を膨らませて、待ち望んでいた夜会。
そこにいたのは何週間も獲物を食べていない飢えた獣と、その獣に
ねらわれたあわれなか弱いうさきちゃん、であった――――

ｂｙ　アルレロト雑誌記者　リディア
【王宮のここからここまで！　～夜会には危険がいっぱい！？～】
より

「は、はじめまして！　あ、あたしはリリーシェル・シュテンベルクですっ」

その、ふるふるがたがたの少女こそが、ある記者いわく、あわれなか弱いうさきちゃん――――リリーシェル・シュテンベルクである。
そのふるえ方は尋常ではない。

薄い布を何枚もかさねてふんわりとした、淡い桃色のドレス。
年増の女性が着れば見苦しくみえるそのドレスも、初々しく若さあふれる彼女が着れば、ひどく愛らしい。
ふわりとした柔らかそうなそうな髪は光を紡いだような金。今は小さな白い花と一緒に編みこまれている。
健康そうな肌色も、緊張で落ち着きのない緑眼も彼女の愛らしさをひきたてる。

しかし、その顔色は青ざめている。さきほどもいったように、身体はふるふるがたがた。何かにおびえているようである。

さて、そのおびえた視線は目の前の女性に向けられていた。

「あら、はじめまして」

その女性は、リリーシェルと雰囲気もドレスも、まったくの正反対であり、すべてが異なっていた。

身体の線を強調するような、肌にぴったりとした黒のドレス。
それが似合うどころか、ふさわしいと感じるほどの見事なプロポーション。豊かな胸に、きゅっと引き締まったウエスト。手足もすらりと長い。
ひとつひとつの些細な動作さえ、しなやかで洗練されている。その美しい立ち姿は遠くからでも人の目を惹きつけるだろう。

しかし、もっと目を惹くのは、その美貌。
痛みなど知らない、腰までまっすぐのびた美しい黒髪。髪はすべてを結い上げず、ハーフアップにされていた。背中に流れる毛先まで艶やかな長い髪からは、丁寧な手入れをされていることがよくわかる。
しみひとつない肌はぬけるように白く、黒のドレスがそれをさらに、ひきたてていた。
左右均等に配置された顔に、アクセントをくわえるかようにある口元の黒子もなんとも色っぽい。
一部の狂いもなく整っているせいか、どこか冷たい印象をあたえる顔の造作は、いっそ相手に恐怖を与える。底の見えない黒い瞳は、まるでこちらのことなどすべて見透かされているようで、その恐怖にさらに拍車をかけた。

「わたしは、この国の第一王女であるルクレティア・シュテンベルクですわ」

けして高すぎない、つややかなアルトよりのソプラノ。
その整った唇から紡ぎだされる声は、とても美しく、聞くものをおもわずふるわせる甘さがある。
しかし、その甘さを感じる前にほとんどの者はその堂々した余裕が感じられるそのようすに圧倒されてしまう。

「わたし、あなたが来るのをたのしみにしてたの。これからよろしくお願いいたしますわ」

そして、飢えた獣は、獲物をみてゆったりと笑うのだ。

――――――――――――あの、微笑　で。

「ルクレティア様！　さきほどの微笑は最高でした……！！　口元

は微笑んでいるのに目は笑っていない、まるでなにかを企(たくら)んでいるような、あやしい微笑！　ルクレティア様の絶世の美貌と、たっぷりのお色気フェロモン、それに紫と黒を連想させるオーラが加わり、まさに悪役！　って感じで……！！」

「……ねえ、それ褒めてる？　褒めてるの？」

「あの方、ぜったい堕ちましたよ！」

「堕ち……、恋に落ちるとかじゃなくて、堕ちる……！　そんなに凶悪……！？」

「まあ、まあ。それほど気にしなくても。ただ、王女の第一印象が“近寄りたくはない人”と思われただけで」

「……！！」

「アーネスト様、ひどいです！　あの方が感じたルクレティア様の第一印象はそんなものではありません！」

「ネリネ……」

「“怖いっ！　わたし、あの人絶対無理っ！！”　です！」

「……あれ、おかしいわ。眼から水が……」

「この侍女の観察力と洞察力は長けていますからねえ。
なんたって、王女のことがわかるくらいですから」

「……もう景色がかすんでみえないわ……」

「うーん……。あっ！　ルクレティア様、これはいかがです？　今度は微笑を浮かべず、無表情でいるのです。
わたくし、その表情も……（うっとり）。　あっ、でもさきほどの微笑の魅力がわからない人には結局おなじでしょうか？」

「王女の恥ずかしがり屋と、不器用さを直さなければ無理ですね」

「！　なら、なお…

「直したいと言っても私が許さないのでそれも無理です」

「わたくしもアーネスト様に賛成です！！」

……わたしにどうしろと…！？」

「いいじゃないですか。
表情がなかったら、ただ“怖い”だけ。
王女の微笑なら、それに“悪女っぽい”＋“友達になれそうにない”が追加されますよ」

「そんなお得ポイント　いらないわ！！」

さてはて。
のちに「日常」といわれる「非日常」のはじまり　はじまり。

ある非日常の始まり（後書き）

時間を割いて読んで下さり、ありがとうございました。

次話も、よろしくお願いします。

ある雑誌の人気コーナー

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

【王宮のここからここまで！　～夜会には危険がいっぱい！？～】

ついにやってきた！

今夜は、どの貴族たちも好奇心を膨らませて、待ち望んでいた夜会。
そこにいたのは何週間も獲物を食べていない飢えた獣と、その獣にねらわれたあわれなか弱いうさきちゃん、であった。

―当日の現場より―

さて、今回“黒薔薇の姫”に狙われた、あわれなか弱いうさぎちゃん。それは、リリーシェル・シュテンベルクである。
そう、夜会のメインであった、あの“王の隠し子”だ。

彼女は、今回の夜会で正式に王の子と発表され、第二王女となった。

どうやら、王妃＞“黒薔薇の姫”の母＜の元侍女が、彼女の母親らしい。
ではなぜ、二人は王宮に住んでいなかったのか。
それは、侍女が王の赤子を身ごもったと知ると、王妃がすぐに王宮から追い出したからだった。その後、追い出された侍女は無事赤子を産み、街で小さな店を経営し生活していた。今まで彼女は街で針子として働いていたのだ。

さて、街の針子から国の王女となった、シンデレラガールのリリーシェル。

彼女の容姿は、王とそっくりな金髪に緑眼。ふわりとした髪質や、くりっとした二重も王にそっくり！（これで彼女が王と血が繋がってない、とは誰もいえないだろう）王の色素をそのまま受け継いだフロックス王子とまさに姉弟！というかんじである。ぜひ、一緒にいるところをそばで見たい。

また、淡い桃色のドレスが彼女の柔らかな雰囲気とよく似合う。緊張でピンクに染まった頬は、おもわず頬ずりしたくなる。なれないドレスや夜会で、ぷるぷる震えているのも、庇護欲をかきたられる。

それに……

おおっと、話がずれてしまった。この続きが知りたい方は６７ページで！

さて、ここ数週間、悪事の噂が流れなかった、飢えた獣ーーーーもとい、“黒薔薇の姫”。

「あの“黒薔薇の姫”が！？」「もうこの国は滅ぶ……！」と、たくさんの人々に心配されていた。

だが、みなさん安心してほしい。どうやらその間“黒薔薇の姫”は次の獲物（リリーシェル）のための準備をしていたらしいのだ。

そこで「なんの準備だ？」と聞くのは野暮なことである。

今回の夜会も“黒薔薇の姫”存在感は、とてつもなかった！
ドレスの色は通り名にふさわしく、黒。身体にぴったりとしたデザインも、彼女の魅力を最大限にひきだしていた。

そして、“黒薔薇の姫”といえばみんなのアイドル、アーネスト・ダーウィン！
主をひきたてるかのように、ところどころ金をあしらった白の正装。
その華美な正装も、普通の者が着れば服に着られている感がぬぐえないのに、彼は見事に着こなしていた。

また、この二人が入室したとき“黒薔薇の姫”がしゃべるまで誰一人うごかない・しゃべらない、というのは、もうお約束である。
（というか、二人の圧倒的な美貌・存在感に意識がとんで、うごけない・しゃべれないのだ。実際、あまりの衝撃に失神したものや、一時心拍停止になるものが続出する。今回も初デビューした者を中心に数名被害が出た）

絶世の美貌。
黒と白。　悪と善。

たしかに、優しいアーネスト・ダーウィンをふりまわしている、わがままな“黒薔薇の姫”を悪くいうものは多い。

だが、彼女ほど彼にふさわしい者はいないだろう。
容姿はもちろん、性格でも。

おおっと。これ以上いうと、アーネスト・ダーウィンのファンクラブたちに命をねらわれかねないので、ここまでにしておくが。

ああ、ちなみに。話がそれてしまうのは、わたしの個性なのでご愛嬌。

話をもどそう。……と、その前に。

忘れていた、もしくは知らないあなたに、もう一つ。

さて、可愛らしい第二王女に、妖艶な“黒薔薇の姫”。

実は、１６歳と１７歳！

一歳しか年が変わらないというのだから驚きである。

（特に“黒薔薇の姫”が１７歳ということが。）

では、今回の見所！

この夜会で、彼女（リリーシェル）へ“黒薔薇の姫”の一言。

「わたし、あなたが来るのをたのしみにしてたの。これからよろしくお願いいたしますわ」

まさに宣戦布告、いや、獲物をおいつめはじめる、合図。

そして、極めつけは、あの微笑。
おもわず吸い込まれてしまいそうな、底知れない瞳。その瞳はすべてを見透かしまうような鋭さがある。口元が微笑んでいることでそれがより強調され、「どんな仕打ちをされるのだろう」と、いっそう恐怖をかりたてられる。“黒薔薇の姫”の妖艶な雰囲気も、余裕のあるその態度も、さらにそれを煽った。

まるで　「逃がさない」　と、いっているようで。

はたして、うさぎちゃんは飢えた獣から逃げ切れるのか……！？

次号も、ご期待！！

ｂｙ　アルレロト雑誌　記者　リディア

この夜会に参加していたものは、のちに発行されたある雑誌の記事を読んで、“ああ、たしかに。うまく的を射ているな”と、書いた記者を絶賛した。

――――――そして、この記事を知ったルクレティアは寝込むことになったのだか、それはまだ後の話。

ある雑誌の人気コーナー（後書き）

人気を聞きつけた侍女、ネリネに伝える
←
ネリネ、興味をもつ
←
買う
←
ほくほく顔のネリネ
←
ルクレティアに見せる
←
数分後、ベットの中でうなされているルクレティア
＋
嬉々として介護をするアーネスト
――
平和？

ありがとうございました。次話もよろしくおねがいします。

あるマル秘計画！　第一回　上（前書き）

※ガールズラブ要素あり

あるマル秘計画！　第一回　上

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

白と黒を基調にし、家具や小物も品のよく統一されている部屋。
そこには、一つのテーブルを囲むように三人の男女がいた。
この部屋の主人なのだろう、椅子に座っている黒髪の女性。そして、その両脇に立っている銀髪の男性と亜麻色の髪の女性だ。
いまこの部屋の空気は、重々しく、普通の人ならば逃げ出したくなるほどの緊張感があった。
その緊張感の元が、中心にいる黒髪の女性。
どんな人物でも、この部屋にいたら彼女に主導権を握られてしまう、そんな目にみえない力を感じる。まるで、この空間では彼女しか動くことも発言することさえも許されていないかのような。

そんなピリピリとした緊張感の中、黒髪の女性は両脇にいる二人の従人をゆっくりした動作で見る。

“これからいう事は重大なことだ。他人に言ったらどうなるかわかるな？”と言い聞かせるかのように。

二人もそれが伝わったのか、ゆっくりとうなずく。

それを合図に、黒髪の女性が口火を切った。

「これから、極秘会議をはじめる」

その厳かな物言いは、おもわず背筋を正させられ、

「ーーーー名づけて、リリーシェルと友達になろう大作戦！」

……た。

と思いきや、その内容はずいぶんと――

「イタイですね」

「ルクレティア様ですもの！　さすがです！」

「――あれ？　さりげなく肯定？　イタイっていうこと否定なし…！？」

なかなかの出来だと思ったのに……！

「“王女が”ですよ。イタイのは」

ルクレティアの心を読んだかのように、アーネストはにこやかに言った。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ごほんっ！

ルクレティアが、気を取り直すかのように咳をした。

「いい？　リリーシェルが王宮に来たんだから、本格的に動き始めるわよ！　まずは、現状整理。ネリネ、おねがい」

「はい！」

今まで街の針子だった少女（リリーシェル）
←
実は王の隠し子。王宮へ
←
第二王女になる
←
まさにシンデレラガール

←
そうなると、もちろんヒロイン
←
そして異母姉妹のルクレティア
＋
舞台は王宮
←
「シンデレラ」でいうと義理の姉の位置
＋
権力争い・女の醜い嫉妬が渦巻く

イコール……

（ーーーーん？　ちょっとまって。　ま、まさか、わたしって……）

「まあ！　ルクレティア様ったら、悪役ポジションですね！」

グサッ

まさに、自分が思っていたことをさらりと（しかも嬉々として）言われたルクレティア。

その心に刺さった刃は、頑丈で大きい。

「しかも、このままいくとヒロインとは和解せずに終わるタイプの」

アーネストは、さらにその傷に丹念に塩を塗りこみ、刺さった刃でドリルのごとく深く深く心をえぐる。

「ーーーーっ。いいじゃないのっ。うけてたつわ！」

しかし、ルクレティアも負けてはいない。アーネストから自身の心を守るため、幼い頃からの長い付き合いで身についた数々のわざの一つを持ち出した。

「めざすは、“親切な姉”ポジションよ！」

“なにごとも前向きに！”

聞こえはよいがルクレティアの場合、実際はーーーー

「あらすじはこうよ！

“いきなり王宮にでてきた田舎少女。王宮の女性にはない魅力に様々な男性は惹かれていく。それをみて嫉妬する女性たち。もちろん、少女の新しくできた姉も……と、おもいきや！　それは大きな間違いだった！　それどころか、困っている少女に手をさしのべる優しい姉だったのだ！”」

ただの“現実逃避”である。

「まあ、すてき！　ルクレティア様！

“孤独な少女にとって、姉の優しさはあたたかい光。そう、この王宮の中で姉が唯一のこころの支えだった！”」

「さすがよ！　ネリネ、分かっているじゃない！」

「“そして、だんだん姉に惹かれていく少女。”」

「そう、そう」

「“血が半分繋がった姉妹だと理解しながらそれでも惹かれていく気持ちはおさえられない。”」

「そう、そ……、　ーーーーん？」

「“せつない想い。　しかし、問題はそれだけではなかった！　なんと、姉の教育係兼護衛が主人でもある姉にせまっていたのだ！　そして、さらなる追い討ちは、姉の思い人は、少女でもなく姉の教育係兼護衛でもない、そう……！　姉の専属侍女……！！”」

ゴツッ

鈍い音が響いた。

「〜〜っっっ！？　アーネスト様、ひどいです！　なぐるなんてっ！」

「……まあ、今回はアーネストが正し…」

「ずるいですよ。一人だけいいとこどりなんて」

「えっ、そこ！？　っっこむところそこっ！？」

もっと、受け流してはいけないところがあったわよね！？

突っ込みをいれるルクレティアを華麗にスルーし、話を進めるアーネストとネリネ。

「ーーーーでは、ルクレティア様の愛人1号、2号ということで」

「どちらが？」

「……わたくしが2号で、アーネスト様が1号です」

「まあ、良しとしましょう」

「どこが、良し、なのよぉぉ！！」

本日一番のルクレティアの叫びがきまった。

「とにかく、最終目標はヒロイン（リリーシェル）と打ち解けて友達になることよ！」

ルクレティアはこぶしを突き上げた。

その姿をネリネが頬を染めて見つめ、アーネストは相変わらず聖人のような微笑を浮かべている。

最初の頃の緊張感など嘘のような雰囲気である。……本人（ルクレティア）は大真面目なのだが。

もう大人といっていい女性が、少女（といっても一歳しか変わらないが）と友達になるために計画をたてているなんて……。やっているのが“黒薔薇の姫”でなくとも「なにをたくらんでいるの？」と、聞きたくなる。

しかし、ルクレリアの場合、この“友達”に“初めての”という言葉が前につくのだから、彼女の異様なほどの気合の入れ方は当然のこと。必死さにも納得である。……と、同時になぜだろう。涙をさそわれるのは。

「いい？　合言葉は、“優しさはさりげなく！”
あまり、おおっぴらにやりすぎると逆に不審がられるわ。あくまでも気遣いはさりげなく、かつ確実によ」

（ぜったい、あのときの二の舞にはならないんだから……！）

前回の夜会での経験で、少し学習したルクレティア。

はたして、このことがいい方向へころぶのか。

「焦らず、こつこつと好感度をあげていくの！　アーネスト、ネリネ、協力たのんだわよ！」

「ええ」

「はい！」

（リリーシェルとおしゃべり……。城下でお買い物もいいわよね……。　うふふ……）

すでに頭の中は仲良くなったリリーシェルとお楽しみ中のルクレティアは、忘れていた。

この二人がどういう人物なのかを。

今までどんな目にあってきたのかを。

「王女」

「？」

「にやけて顔面崩壊させているよりも、」

「ーーーーなによ、喧嘩買うわよ？」

「まずはその対象と接触しなくては何もはじまりませんよ」

「……！！」

そして、自身のとてつもない不器用さを。

“第一回　リリーシェルと友達になろう大作戦！”は、まだまだ終わりそうにない。

あるマル秘計画！　第一回　上（後書き）

今回上下です。

次話もよろしくお願いします！

あるマル秘計画！　第一回　下（前書き）

「まずはその対象と接触しなくては何もはじまりませんよ」

「……！！」

あるマル秘計画！　第一回　下

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

「わ、わかっているわ！　ただ、いい案がないだけで……」

「つまり忘れていたと」

「ち、違うわよ！　ネ、ネリネ、なにかいい案あるかしら？」

「う～ん。そうですね――――……」

「大丈夫ですよ。王女」

なにを無駄なことをしているんだというように、アーネストがにこやかに助言する。

「王女ならどんな突拍子のないことでも相手に受け入れてもらえますから」

「悪い意味でね！」

まるで役に立たない助言であった。

「そんなに謙遜しなくても」

「してないわ！！　〜〜っ、悲しいけど、事実！　というか、その元凶はあなたよ！」

ルクレティアは自分で言って、自分が撃沈しながらも、アーネストへの攻撃はやめない。

「そんなに褒めなくても」

「だから、してないわ！！」

まるで歯が立たないが。

言い合うルクレティアとアーネスト（ルクレティアがアーネストに遊ばれているともいう）をよそに、さきほどから悩んでいたネリネ。

「う～ん。何かいい案……。　ああ！　ルクレティア様、お茶会など開かれてみては？」

「まあ！　いい考えね！
紅茶はこの国の特産なだけあって、とてもおいしいし。お菓子は何にしようかしら？」

「わたくしが作りますわ！」

「……普通のを、ね」

「ええ！　秘薬たっぷりを！」

「ーーーーちょっとまって。……普通のが、秘薬入り？」

少々どころか、かなり聞き捨てならないことが聞こえたルクレティア。

おもわず、もう一度たずねた。

「もちろんです！」

最高なものをつくります！

そう、自信たっぷりに断言するネリネ。

ーーーーーーーから、おもいっきり目をそらし、一言。

「……普通じゃなくていいわ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「はじめてのリリーシェル様とのお茶会ですもの！　なにか記念に

のこるようなことをしたらいいかかです？」

「いい考えね！　ーーーーやっぱり無難にプレゼントをあげるとかかしら？」

「そうですね！　モノならずっとのこりますし」

「でも、プレゼント、ねえ。刃物入り手紙に、虫の詰め合わせぐらいしか女の子に貰ったことがないんだけど……」

あまりにもルクレティアに嫉妬した（主にアーネスト関係の）女の子から“そういう”プレゼントが多かったため、“刃物入り手紙はまだしも、意外にも虫は女の子の間で人気なのかしら？”と、本気に思って、わざわざ好きでもない虫を集めて貴族の女の子達にプレゼントしまわったことは今ではイタイ思い出である。

（ーーーーん？　今思えば、その頃からわたしの悪い噂がたっていたような……）

ちなみに、その時アーネストは止めるどころか、ルクレティアの思い込みを利用して“王女の友達を増やすためにも”とかいい、刃物入りの手紙が送られてきた元にも虫たちを送っていた。……ルクレティアの名前で。

――――つまり、加担していたのだ。もちろんルクレティアにではなく、ルクレティアの噂にである。

さて、現在のアーネストはというと……

「王女ったら、おいたわしい……」

わざとらしく、目じりをぬぐっていた。

「大半の元凶であるあなたに言われたくないわ！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「はぁ。プレゼント何にしようかしら……」

「ルクレティア様。わたくし、リリーシェル様の思入れの深い品など調べてきます」

「まあ！　助かるわ！」

「では、私はさっそく特産の紅茶を入手、お茶会のセッティングを決めておきましょう」

「……いや、たしかに助かるけど。あなたの仕事って……」

「王女の教育係兼護衛です」

「……うん。そのはずよね」

（どちらの役割もお茶会のセッティングする必要とかないんじゃ……）

「王女。今さらですよ」

ルクレティアの心の中の疑問に対して“なに、当然なことを”とでもいうように、優しく諭されおもわず。

「そうよね」

納得してしまった。

「それに、２号だけに手柄を持っていかれたらいやですしね」

その落ち着いた美声と麗しい顔（かんばせ）。

普通の者ならば、それだけに気を取られてアーネストの言葉など理解もせずにうなずくだろう。

しかし、今回の相手はもう約１０年の付き合いになるルクレティアだ。そう簡単にはいかない。

「そうよ――――　……ん？」

……うなずきかけたが。

「――――２……ご…う……？　――――――愛人設定はナシよ！ナシ！！」

「本当ですか！？　ルクレティア様！」

“もう、この世の終わりだ…！”というように、いきなり横から叫んだネリネ。

その顔はショックを隠せない。
ここまで反応するとは思わなかったルクレティアは、おもわずひるんだ。

（いや、ふつうはナシでしょう……！？）

「王女の計画にはもってこいの設定なんですがねえ」

アーネストが残念そうに言った。

「ーーーなんですって？」

自分の計画にはもってこいと聞き、興味をもったルクレティア。
早く言うようにアーネストを目でうながす。

「はい。王女、舞台はこの王宮」

「そして、この愛人設定。ーーーーーーー最高のドロドロな舞台を作り上げて見せますよ」

「ただの計画妨害だわ！！」

聞いたわたしが馬鹿だった、とでもいうように、ルクレティアは額に手をあて大きなため息をついた。

だがアーネストは、なお言葉を続ける。

「しかし、王女。舞台がドロドロであればあるほど、王女の“優しさ”が引き立つのでは？」

「……いわれてみれば……」

「そうですよ、ルクレティア様！　絶望の中で差し伸べられた手はどんなものでも、心にきます！　けして忘れられないものになるでしょう！」

たしかに。

二人の案は一気に印象も上がるし……

でも、こつこつと積み上げていったほうが……

どちらにしても、気遣いは大切よね。

なら……

「う～ん」

悩むルクレティアは気づいてなかった。

はじめは、悪い第一印象を修正させるためにも“リリーシェルに優しさをアピールする”だったのが、二人の案でさりげなく“リリーシェルを絶望に追い込ませて手を差し伸べる”ことになることに。

――――そしてそれは、物語の悪役がヒロインに取り入るためによく使われる方法だと。

はたして、ルクレティアは二人の案を受け入れたのか。

「ふふふ。準備が着々と進んでいるわ！」

白と黒を基調とされた部屋に、女性のつややかな声が響いた。

第一回　リリーシェルと友達になろう大作戦！　にて

○目標ポディション……優しい姉兼友達

○第一段階……お茶会に招待

→

・会話をしてお互いを知る。

・笑顔を忘れない。

・プレゼントを用意。

○優しさ・気遣いはさりげなく！

あるマル秘計画！　第一回　下（後書き）

次はいよいよリリーシェルとお茶会……！？

次話もよろしくお願いします。

ある昼下がりのお茶会

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

空は晴天。
雲ひとつない鮮やかな青がひろがる空は、まさにお茶会日和。

「まあ！　いらっしゃい」

天をも味方につけたその女性は、ゆったりと微笑をうかべるのだった。

ーーーーーーー獲物を逃がすものかと、瞳を鋭く光らせて。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は、待ちに待ったお茶会。

もちろん、ただのお茶会ではない。

じっくりとこの日のために練られた計画を実行、そしてリリーシェルの好感度を上げよう！　という、崇高な目的があるのだった。

「改めて。新しくあなたの姉になるルクレティア・シュテンベルクですわ。こちらが、わたしの教育係であり護衛をつとめているアーネスト・ダーウィン」

さて、そんな大切なお茶会によばれたのが……

「リ、リリーシェルと申しますっ。このような会に、お、お招きいただき……」

もちろん、このお茶会の目的（メイン）であるリリーシェル。

今日は、淡い黄のドレス。ふわりとしたイメージのドレスは、リリーシェルの雰囲気に良く合う。

そして――――

（あら？　誰かしら？）

茶髪の男性。

年齢は二十歳前後。
髪は襟首にかからない長さの、日にあたると所々、金にひかる茶色。
瞳も茶色だが、どちらかというと髪の色より濃い。
背は１８０ｃｍぐらいだろうか。アーネストと変わらないか、指一本分低いか。
精悍な顔立ちだが、“頼り甲斐がある”というより“やんちゃな青年”という印象をうける。

その茶髪の男性はリリーシェルの一歩後ろにたたずんでいた。
制服のデザインからして騎士だろう。腰には剣をさしており、警戒しているのか剣の柄に手を添えている。

「そちらの方は？」

「あっ！　この人は、あたしの……」

「護衛をつとめるライラック・フローディンだ」

リリーシェルが言い終わらないうちに、その茶髪の男性――ライラックは前に出た。リリーシェルをかばうかのように。

（侍女より護衛をつけた、のね。王そっくりでも、いきなりぱっとでてきた“王の隠し子”ですもの。後見人は王だし、男ではなかったから最悪の場合まではいないけど、よからぬことを企むひともいるからねぇ。王の溺愛っぷりが分かるわ……）

その“よからぬことを企むひと”として真っ先にあがる人物が“黒薔薇の姫”だということは、ルクレティアは知るよしもない。

「さあ、さあ。お座りなさいな」

「は、はい」

テーブルには、この日のために取り寄せた紅茶。そして中心には精密に作られたバスケット。その中には、さまざまな種類のクッキーたちがたっぷり入っている。手作りとは思えないお菓子たちは、目を楽しませるのはもちろん、味もよいことをルクレティアは知っている。

その材料が、普通ではないことも。

（今回のお菓子は“普通”のはず。　……いや、“普通ではない”方がいいのかしら……？）

さて、そのお菓子をつくった者ーーーーネリネは、ここにはいない。現在、アーネストに押し付けられた仕事（雑用）の処理にいそしんでいるのだ。

“ずるい、ずるいです！　アーネスト様だけなんて…！”

そうして、ストレスをためたネリネが同僚に愚痴り、ルクレティアの誤解に（無意識に）加担していくのは、また別の話。

「もう、ここには馴染んだの？」

「は、はい」

「どう？　けっこう良いところでしょう？」

「は、はい」

「友だちはできたの？」

「ま、まだ」

「……今日は、いい天気ねえ」

「は、はいっ」

「……」

「……」

「……」

（か、会話が、続かないわ……！）

どうしましょう…！！

一言で終わってしまうわ。

なにか、良い質問は……

ーーーーーああ！

「あなたのこともっと知りたいの」

おしえてくれる？

（ああ、笑顔を忘れちゃいけないわ）

ピシリッ

空気が固まった。

いや、正確にいえばリリーシェルとライラックが。

（え！？　なにか間違えたかしら！？）

そして、その空気を察知したルクレティアも。

紅い果実のような唇からこぼれる甘く囁くような声が、ルクレティアに免疫がないリリーシェルとライラックの身体をふるわせた。

そして、極めつけはあの微笑。

“黒薔薇の姫”の由来のひとつでもある整いすぎた冷たい美貌に浮かぶ笑みは、親しみやすい印象をあたえ相手をリラックスさせる（本人（ルクレティア）はそれをねらっているのだが）どころかさらに増す迫力に相手はおもわず固まってしまう。

まあ、“見惚れて”ということもあるのだが、どうやら今回（リリーシェル）の場合は前者らしい。
その証拠に、リリーシェルの様子はまさに“へびににらまれたカエル”。目も見開いたまま、瞬き一つしない。

そして、それを察したルクレティア。
ここで「あら、どうしたの？」なんて心配して聞いた瞬間、相手は失神することは分かっている。というか、二、三度（本人（ルクレティア）が自覚がしてなかっただけで実は十数回ほど）あったので、そこから学んだのだが。

しかし、他に問いかけをするにも相手の硬直状態をみれば、しゃべるどころか思考さえはたらいていなそうなのだから無駄に終わるだろう。

考え、考え、考えぬいたルクレティア。

「ーーーーーーこの紅茶はとってもおいしいのよ」

ルクレティアはこの国の名物でもある人気の紅茶をすすめた。
少しでもリリーシェルにリラックスしてもらうためである。そして、自分も一息ついて落ち着かせるためでもあった。

「どうぞ」

アーネストが冷えた紅茶を新しく注いだものに代えた。
ティーカップを置くときも一切音を立てず、その流れるような優雅な動作は、執事顔負けだ。……実際は、ルクレティアの教育係兼護衛なのだが。それをやる必要も、もちろんないのだが。
そんな疑問も周りの者は“黒薔薇の姫”だから、と納得されてしまう。
そして、それは“アーネストが勝手（強引ともいう）にやっている”ことなのに、“ルクレティアが命じている”に脳内変換されている。
その認識に、ルクレティアが大きなため息をつかざるをえない。
まあ、ルクレティアも、もう何年も続いてもはや“習慣”となったものを今さらかえる気はさらさらないが。
アーネストが入れる紅茶は誰よりもおいしいのだ。
たとえ、入れている者の正体が、猫を１００匹かぶり、お腹が真黒でひねくれた一癖あるどころではすまされない者でも。
そんなアーネストの正体（ルクレティアいわく）を知らず、緊張していたリリーシェルもアーネストに見惚れているのが、わかる。
そして、リリーシェルの護衛――ライラックが、それを見て唇をかみしめていることも。

しかし、ルクレティアは気づかない。
もちろん、アーネストがリリーシェルに紅茶を置いたとき、リリーシェルが真青になって固まったことも。
ーーーアーネストが、彼女へ何か囁いたことも。

「いい香り」
やっぱりこの香りよね。
そうのんきに思っている始末。
「気に入ってくれるとうれしいわ」
ルクレティアがリリーシェルに言った瞬間。
ガシャンッ！
「ご、ごめんなさいっ…！」
リリーシェルが反射的に立ち上がり、蒼白になって謝罪した。

そう、リリーシェルがティーカップを倒してしまったのだ。

「お怪我は？」

アーネストが素早く動き、汚れたテーブルクロス、空になったティーカップを処理した。その一連の行動は無駄がなく、あっという間である。リリーシェルを気遣うことも忘れないあたりも、すべて抜かりない。

「おい、大丈夫か！？」

アーネストに先をこされたことに舌打ちしながらも、ライラックもリリーシェルに安否をたずねた。

「あ、あたしは大丈夫だけどっ……」

「いいわよ。そんなに気にしなくて」

「でも、でもっ……！」

リリーシェルは、すっかり恐縮してしまった。

ゆっくりお互いのことを話すどころか、椅子に座りそうもない。

（うーん……。　これは次回に持ち越しかしら。　無理やり座らせてもこんなに恐縮しちゃったら……）

黙り込んだルクレティアをどう思ったのか、リリーシェルは頭を下げてさらに謝罪した。

「ルクレティア様のお茶会でこんな粗相をしてしまい……！」

「お、おい！」

位はたしかにルクレティアの方が上だが、第二王女が頭を下げることにさすがにライラックが止めにはいる。　が、リリーシェルは頭を上げる様子はない。

一方、ルクレティアは……

（ルクレティア様、ですって！　名前呼びよ！　名前呼び！）

きゃー！！！

悶えていた。

もし、今のルクレティアをネリネが見たらこう言っただろう。

“興奮して淡く朱に染まったすべらかな頬！　喜びのあまり潤ませる黒曜石のような瞳！　名前を呼ばれただけでこのはしゃぎよう！　もう食べちゃいたいくらいかわいらしいです！！”

……無表情にしか見えないが。

リリーシェルの方も頭を下げてしまった以上、ルクレティアからの許しがでないのに勝手に頭を上げることは失礼にあたる。

たとえ頭を下げたことも、頭を上げないことも、リリーシェルが無意識にやっていることでも。

「王女」

アーネストの呼びかけでようやくそのことに気づいたルクレティア。

スッ

椅子から立ち上がり、リリーシェルをうながす。

「許します。頭をあげてちょうだい」

その言葉に、そろそろと頭を上げるリリーシェル。

恐怖でか、涙目になっているくりっとした緑眼。身長差で自然となる上目使い。ねらっていないところがさらによい。

かわいいもの、とくに小動物好きにはたまらない……

そう、すべてがルクレティアのツボにはいった。

その結果。

（か、かわいい～わぁぁ！　抱きしめていいかしら！　いや、その前に手をにぎる？）

また悶えた。

無表情で。

しかも恐ろしいことに、おもわずつっこみたくなるような思考がネリネに似てきている。

「王女」

穏やかに、アーネストの声が再度かかる。

しかし、ルクレティアには分かった。この麗しい微笑にカバーされているが、艶やかなテノールのなかに棘がふくまれていることが。

“なににやけているんですか。これ以上意識トリップさせたら強制終了させますよ”　と。

「あ、ああ。そうね、天気も悪くなってきそうだし、そろそろお開きにしましょう」

いまも空は雲ひとつない快晴だが。

（名前を呼んでくれたという収穫もあることだし。少ししかお茶会ができたかったけどまだまだ機会はあるわ…！　ああ、そういえば。“あれ”のタイミングはいましかないわよね）

「アーネスト、“あれ”を」

「かしこまりました」

サッ

どこに隠し持っていたのか、アーネストはすぐさまルクレティアに箱を差し出した。

箱の形は、底が手のひら二つ分くらい、高さが人差し指の長さくらいの長方形。淡いピンクを地に、白金で細かい模様が描かれている。その箱だけでも、相当の値打ちはするだろう。

「はじめてのお茶会の記念に」

「……！　ありがとうございます！　あたし、何も持ってきてないのに……」

「いいのよ。わたしが勝手にやったことですもの。それより、箱を開けてみて？」

リリーシェルは、ゆっくりと受け取った箱を開けた。

「あなたのためだけに特注で取り寄せたのよ」

（あのアーネストが能力を認めるネリネが調べた品ですもの。絶対

よろこんでくれーーーー）

「ーーーーーーーーーーっ！！！」

声にならない悲鳴が聞こえた。

「ーーーーー？」

その悲鳴の出所は、足にまとまりつくであろうドレスなど気にもせずに、走り去っていくリリーシェルであった。その目じりには涙がたまっていたのは見間違いではないだろう。

「ーーーーーえ？」

リリーシェルの予想外の行動に思考がついていけず、ぽかんとするルクレティア。

呆けているのに表情ひとつ動かない不器用さは、ここまでくると、いっそ器用である。

「リリーシェルっ！　くそっ、お前たち今度会うときおぼえていろよ！」

どこぞの三流悪役のような捨て台詞を残して、リリーシェルの後を追っていくライラック。

ーーーー只今、この場所に残っているのは……

受け取り主においてかれ、無残にも地面に落ちたリリーシェルへのプレゼント。

「教育がなっていませんねえ。いろいろとあらが目立ちますし。あれで護衛が勤まるのでしょうかねえ」

心地よい日差しに目を細めながら、のんびりしゃべるアーネスト。

「ーーーーえ？」

そして、未だに状況が把握できていないルクレティア。

いや、たしかに会話ははずんでなかったけど。
いや、もしかしたらあまりにも嬉しすぎて……
いや、でも泣いていたわよね？
いや、実はうれし涙を見られたくなくて……
いや、……

「なんでぇぇえ！？」

「うるさいですよ」

空は晴天。

雲ひとつない空は、己が味方についたはずの女性の叫びなどいざ知らず、ただ鮮やかな青をひろげるばかりであった。

ある昼下がりのお茶会（後書き）

「今から緊急会議よ！！」

次話もよろしくおねがいします。

あるマル秘計画！　第二回

ある大きな大陸の
ある小さな国の話。

「第二回　緊急会議をやるわよ！」

「まず、今回の議題は“なぜ、リリーシェルが走って行ってしまったのか”よ！」

「ああ。そういえば、泣いていましたね」

「まあ！　ルクレティア様、リリーシェル様が泣かれたのですか？」

「ぐっ……」

その事を気にしないようにわざと言わなかったのに、容赦なくルクレティアの傷をえぐる二人。
こちらが泣きそうになるのを必死に隠すために、ルクレティアは声を張り上げた。

「その原因を探るために今こうして会議を開いているのよ！　なにか有力なことは！？　特にお茶会に参加していたアーネスト、なにかある？」

はい、とアーネストはルクレティアのそばに近寄った。

「王女、手紙です」

「ん？　なによ、こんなときに。
ーーーーーまあ！　リリーシェルからじゃないの！！
“お茶会の件では本当にお世話になりました”
ふふ。　気にしなくてもいいのに……。　そこがまたかわいいのよね」

念願の手紙をもらったルクレティアは、うきうきしながら読みすすめた。

―――

―――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――

――――――

パタム。

手紙を最後まで読み終わったルクレティアは丁寧に、それをたたんだ。

「…………アーネスト」

「何でしょう」

「ーーーーーーーーこの手紙の宛て先、」

「私宛てですけど。何か？」

“だれも王女宛てとは言ってませんよ”とでもいうように、さらりと答えたアーネストにルクレティアはブチ切れた。

「“何か？”ですってぇぇ！？　問題ありまくりよ！
なんで、わたしじゃなくあなた宛てなの！？」

しかも、さりげなくわたしに自慢しているわよね！？　そこがさらにむかつくのよぉぉぉお！　と、『アーネスト宛の手紙』より『リリーシェルが書いた手紙』ということを優先してしまい、読んだ手紙を捨てずに捨てられないルクレティアは叫んだ。

「王女と私の差ですね」

「だ　か　ら　な　ん　で、リリーシェルと会う時間も回数も同じなのに差がでるのよ……！？」

「“人徳の”差ですよ」

「……！　よりにもよって、あなたに負けるなんて……！」

“これほどショックなことはないわ…！”とルクレティアは片手で顔をおおって打ちひしがれた。

「しかも“命を助けていただき……”ってなによ！　命なんてねらってないわっ」

「ほんとに何でしょうねえ」

「わたしたち、何もしてないわよね！？」

「ええ」

「はい！」

「セッティングもよかったし……　あっ！　もしかして、肝心の気遣いができていなかった！？」

「私はしっかりやりましたよ。王女の命令通りに」

「えっ、いつよ？」

「紅茶を差し上げるとき、“危険です。お気をつけ下さい”と」

「犯人は、おまえかぁぁぁあ！！」

事件もおこりそうもない平和な国で、名探偵顔負けのきめ台詞が部屋中に響いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「わざと！？　わざとなの！？　絶対わざとでしょう！？」

「人聞きの悪い。ただ、入れたばかりで紅茶が熱いので“危険です。お気をつけて下さい”と」

りっぱな気遣いでしょう？

「分かっていてやったわよね、それ！？　前半言わないだけで、わたしが紅茶の中に毒を入れたみたいに聞こえるでしょう！？」

「おや、本当ですね」

いかにも今気づきましたというように、目を軽く見開き口元に手をあてるアーネスト。

「まあ！　アーネスト様ったら、おっちょこちょいですね！」

「わざとらしいわ！！

そんな悪意の塊を無意識でやっていたら、もう鈍いとかの問題じゃないわ！　素でやっている人は、もはや天然記念物よ！」

「天然記念物だなんて。たしかに私ほど完璧な人は大陸中探してももう一人といませんが、そうはっきり言われると照れますねぇ」

「ほめてないわっ！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ぜぃぜぃ、と怒鳴りすぎで息が上がったのを落ち着かせるために、ルクレティアは紅茶を一口飲んだ。

「リリーシェルが途中から挙動不審だった理由は分かったとして……」

「最初から挙動不審でしたよ」

にこやかに茶々をいれてくるアーネストに、額に青筋を立てつつもルクレティアは本題を問いかける。

「なぜ、リリーシェルは走って行ってしまったのかしら…？」

お茶会の後に抜けられない大事な用があったとか？
いや、なら慌てていても泣かないわよね？
やっぱり、プレゼントに問題が？
いや、“あの”ネリネが調べた品だもの。間違いはないわ。
なら、なぜ……

しばらく悶々と頭を悩ませていたルクレティアが、はっと何かに気

づいたかのようにアーネストの方を見る。

「まさか、またあなた……！」

それは疑いというよりも確信に近かった。

「信用がないですねぇ。もう十年以上の付き合いですのに」

主人に疑われて嘆いているような言葉とは裏腹に、アーネストの表情は先ほどより笑みを深めていた。

「だから言っているのよ！　ネリネはありえないし……」

「はい！　ルクレティア様の命令通りにいたしました」

「ほら！　ネリネはちゃんとやったわ！」

「リリーシェル様が一番嫌いな物を選びました！」

「ーーーーーーーーえ？」

ルクレティアは一瞬、ネリネが何を言ったのか理解出来なかった。

「一番、きら…い、な……もの……？」

ぽかんとするルクレティアをよそに、ネリネは嬉々としてしゃべりだした。

「ただ、楽しかった・嬉しかったという経験はよっぽどのものでない限り、時が経つにつれて忘れてしまいます。それに比べ、悲しかった・苦しかったなどのつらい経験は心に傷を負うためか、なかなか忘れません。
一番嫌いな物を送ることによって、『リリーシェル様の思い入れの深い物』を送れるのと同時に“一番嫌いなプレゼントを貰ったお茶会”として一生思い出に残すことができます…！」

“一石二鳥ですよ！？　すごいでしょう？　ほめて、ほめて！”といわんばかりに、胸をはるネリネ。
その表情は、どこか誇らしげだった。

「……」

「よかったですねえ、王女」

“生で天然記念物が見られて”

こちらに向いているその微笑がいつもより意地が悪く見えてしまうのは、先ほどアーネストを疑った仕返しだと思ってしまう被害妄想のせいなのだろうか。

「……っ！！」

ルクレティアは何かを言おうと口をぱくぱくさせるが、言いたいことがあまりにも多すぎて言葉にならず、結局あきらめた。

しかし、これだけは言わせてほしい。

「あなた達の“命令通りやった”ほど信用ならないことが分かったわ……」

さてはて。
今日も、ルクレティアの野望は遠のぞくばかりである。

あるマル秘計画！　第二回　（後書き）

いや、確かにこの二人は王女の命令には背いてはいませんよ？

背いてはいないのですが……。

……言葉は受け取り方次第ですね。

次話もよろしくおねがいします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6463m/

ある王国の日常

2011年10月7日15時28分発行